

「かけがえのない命を守るために」

愛南町立柏小学校 6年 ^{きぐち}木口 ^{かづき}凱喜

ぼくの住んでいる柏地区は、海に近く、南海トラフ巨大地震が起こったら、校区で一番早く津波が来ると言われています。そのため、津波に備えることはとても大事ですが、ぼくたちの地域には、もう一つ大きな心配があります。それは土砂災害です。

柏地区には、山のしゃ面や川が多く、土石流警戒区域やがけくずれが起きやすい区域に指定されている場所がたくさんあります。大雨や大きなゆれのとき、山の石がきがくずれてしまうのではないかと、とても不安になります。実さいに地域探検で山の道を歩いたとき、石がきを見て、大きな地しんが来たらくずれるかもしれないと思いました。

そんなぼくたちを守ってくれているのが、砂防ダムです。柏地区には二段にわたって砂防ダムがあり、山から流れてくる土や石、大きな木を止めて、地区を守ってくれています。ぼくたちの学校では、県庁や土木事務所の方に来ていただき、砂防学習会を行うことがあります。模型や3Dシアターを使った学習を通して、砂防ダムの仕組みや大切さを学ぶことができます。

土木事務所の方からは、ドローンでとった砂防ダムの映像を見せていただいたこともあります。ふ段は見ることでできない角度から自分たちの地区を守るダムの姿を見ることができました。そのとき、このダムがあるからぼくたちの家は守られているんだと強く感じました。祖父も、

「ダムができてからは、少し安心できた。」
と話していました。大雨のときに川の水が増えても、思ったほどにごっていないのは、ダムが土砂を止めてくれているからだと思います。

でも、砂防ダムがあるからといって、安心しすぎはいけません。ぼくの家裏山はコンクリートで固められています。水ぬき穴からにごった水が出てきたら、すぐに避難するようにとされています。また、地区にある内海支所は、風水害のときの一時避難場所になっていて、もしものときは、防災無線で避難の呼びかけがあるそうです。だから、家族と「どこへ逃げるか」「どうやって逃げるか」を話し合っておくことが、命を守るために大切なのです。

ぼくたちは地域探検の後、「防災マップ」を作りました。土砂災害については、危ない区域を黄色や赤のセロファンではりつけ、だれが見ても分かりやすいようにしました。みんなで協力して作ったマップを見て、地域の人の役に立つことができたかなと思いました。

防災学習を通して分かったのは、「自然災害は必ず起こる」ということです。津波も土砂災害も、人の力で止めることはできません。でも、被害を小さくするためにできることは、たくさんあります。砂防ダムのようなし設を整えることも大事ですが、ぼくたち一人一人が「もしもの時にどう行動するか」を考えておくことが、一番大切なことだと思います。

ぼくは、防災学習を通して、ぼくたち子どもにもできることがあることに気づきました。それは、学んだことを家族や地域の人に伝えることです。雨が強くなったら早めに逃げようとか、川や山の様子に気をつけようと声をかけ合うだけでも、災害に対する気持ちは高まります。また、家で防災バックを用意したり、防災倉庫にどんな物があったらよいか考えたりすることもできます。

近いしょう来、大きな地しんや大雨が必ずやって来ます。そのときに柏地区のみんなが無事でいられるように、砂防ダムを大切にしながら、地域で支え合い、備えていきたいです。そして、土砂災害からも津波からも、かけがえのない命を守れるように、これからもしっかりと学び、行動していきたいです。

「命を守るために」

松山市立南中学校 2年 ^{もりおか} 森岡 ^{りん} 凜

僕が土砂災害について本当に「怖い」と感じるようになったのは、平成30年の西日本豪雨のニュースを見た時です。テレビの映像には、茶色く濁った土砂が住宅地に流れ込み家が壊れ、道路が寸断され、人々が避難所で不安そうに過ごしている様子が映っていました。あれが日本で、しかも自分の住んでいる県で起きていたということがすごく衝撃的でした。

西日本豪雨は2018年7月に梅雨前線の影響で広い範囲にわたって大雨が降り続いた災害です。特に広島県、岡山県、愛媛県で記録的な大雨になり、多くの土砂災害や川の氾濫が起きました。たくさんの人の命が奪われ住む家を失った人もいました。僕はその時まだ小学生でしたが、「雨ってこんなに怖いものなんだ」と感じたことを今でも覚えています。

僕の祖母の家は山の近くにありますが、いつもは静かで自然豊かな場所ですが、大雨の時は土砂災害の危険があると聞いています。祖母は「昔から山は怖い所で、雨の日は注意が必要だよ。」と話してくれました。僕は祖母の話聞いて、災害は遠い話ではなく、身近な問題だと実感しました。

学校の授業で土砂災害についてくわしく調べる事がありました。土砂災害には主に、がけ崩れ、地すべり、土石流の3種類があり、大雨や地震がきっかけで発生することが多いそうです。西日本豪雨の時も、山のしゃ面が崩れて家の中に土砂が流れ込んだり、道路が寸断されたりして、多くの人が逃げ遅れました。

僕の住んでいる地域には大きな川があるので「もしかしたら、同じようなことが起きるかもしれない」と思うようになりました。今まで「うちは大丈夫だろう」と他人ごとのように思っていたけれど、西日本豪雨のような災害は、どこでも起こる可能性があることを知り、災害を自分ごととして考えるようになりました。

まず僕がしたことは、祖母の家の周りのハザードマップを調べることでした。市のホームページを見てみると、僕の祖母の家の近くにも、「土砂災害警戒区域」と書いている場所を見つけました。祖母といっしょに避難場所や避難経路を確認し、「夜に避難する場合はどうするか」や「雨が強まってきたら、どのタイミングで避難を始めるか」など、いろいろなことを話し合いました。

また、僕のスマートフォンには気象庁の防災アプリが入っていて、警報が出た時に、すぐ通知が来るようになっています。このアプリを使って警報や避難経路を確認するようにしています。特に警戒レベル3やレベル4の時は災害がせまっていて、命に関わる大切なサインだと思いました。

ニュースで見た被災地の人の話の中に、「もっと早く逃げていればよかった。」という言葉がありました。僕はその言葉が印象に残っています。災害はいつ、どこで、どんなタイミングで起こるか分かりません。だからこそ、「まだ大丈夫」と考え行動しないのではなく、「念のために早めに行動する」ことが命を守る大切なことなんだと強く感じました。

さらに、地域の人たちとのつながりも大切だと思います。もし災害が起きたとき、一人で避難するのがむずかしいお年寄りや子供、体の不自由な方がいたら、周りの人が声をかけて助け合わなければいけません。僕自身は、まだ中学生なので、できることは少ないかもしれませんが、避難所でのマナーや災害時のルールなど、知っておくだけでも役に立てることはあるはずです。

土砂災害は、自然の力によって起こるものですが、防ぐことは人間でもできることがたくさんあると思います。砂防ダムやがけ崩れ防止のさく、排水工事など、国や県が行っている対策に加えて、自分たち一人一人が「もしも」を考えて準備しておくことが、最大の防災になると思います。

これからは、天気予報をよく見るようにしたり、地域の避難訓練に積極的に参加したり自分なりにできることを増やしていきたいと思います。西日本豪雨のような大きな災害を二度とくり返さないために、日ごろからの備えがとても大切だということを忘れずに生活していきたいです。

「災害」の二文字は命のサイレン

松山市立三津浜中学校 2年 ^{こうの}河野 ^{こそら}心空

「ピロリロリン、ピロリロリン。」

真夜中に幾度となく鳴る警報音。胸の奥底がざわつく得体の知れない不安。今にも屋根が落ちてきそうな地響きを立てる大きな雨音。

朝になり、両親の慌てた声で目が覚めた。家に隣接する線路が水に浸かり、大通りに面する店舗の一部が床下浸水していた。当時小学1年生だった私は、事の重大さが分からず野次馬のごとく2階の窓から見渡すと、見慣れた風景が一変していた。隣町では、土砂崩れが発生し、家屋の被害まで出ていたことも後に知った。行き来する緊急車両、テレビで見た光景は幼心にも大変ショックを受けた。

「この間遊びに行った公園の近くだ。怖いな。雨だけでこんなに変わっちゃうんだな。」

この時初めて、災害は人事ではないという命への危機感が生まれた。

この出来事は、西日本豪雨として多くの教訓を残している。

近年、ヒートアイランド現象や線状降水帯の影響からか「集中豪雨」という言葉を日常でよく耳にするようになったと感じる。

令和6年7月、松山城の東斜面でまたしても土砂崩れが発生した。大量の土砂が住宅地に流れこみ、尊い命も奪われた。

この場所は、私の大好きな大叔母が毎朝、ウォーキングをしているコースであり、姉の通学路のすぐ側だったため私はゾットした。

さらに同年11月、「記録的短時間大雨情報」が発表され、「緊急安全確保」までも発令された。この時私は、学校の文化祭の真っ最中だったため、いつもとは桁違いの雨音とは感じてはいたが災害級の大雨だとは知らなかった。

松山市では、松山城での災害を教訓として特に、土砂災害に対する警戒から避難の早期化、情報収集の重要性、防災訓練の実施を進めていたため、迅速な判断や指示出しに繋がることができていた。

土砂災害は、人命や人々の財産を容赦なく奪っていく。天気予報等で事前の予測はされていても、「いつ」「どこで」「どのような規模で」発生するのか分からない。

危険と安全は紙一重であり、人はどれだけ技術が進んでも自然災害をくい止めることは出来ない。いかに防止策を講ずるかが命を守る鍵だと再認識した。そこで、社会科の防災学習で学び、印象に残っていた「三助」を柱として自分なりに考えてみた。

1つ目は、自分の命は自分で守る、家族の命も守る「自助」だ。家族が一緒にいる時に起こるとは限らないのが災害だ。まず家族会議を開き、災害時の連絡手段、合流場所の確認を行い、地域の危険箇所の把握をハザードマップで行った。特に、土砂災害警戒区域の確認や避難場所、避難経路を地図を用いて具体的に見直した。すると、自宅から緊急避難場所まで徒歩5分、最寄りの指定避難場所までは徒歩15分かかることが分かった。

しかし、これは最短ルートを利用した場合の移動時間である。実際、前述の災害時には隣接する線路の遮断機が降りたまま、警告音がなり続き渡れる状況ではなかったもので、遠回りを余儀なくされる可能性が高い。また、祖父母と同居しているため、より早めな避難開始が必須だ。

次に、防災非常袋の中身のチェックをした。主に、水と非常食の消費期限の確認やオールシーズン対応の生活必需品の追加を行い、置き場所も全員で共有した。

2つ目は、地域や近隣住民と協力し、互いに助け合う「共助」だ。これまでに地域の防災訓練に参加したことで避難経路の確認や避難方法の実践、応急手当ての方法、簡易トイレの作り方を学び、地区の集会所の備蓄品の種類と保管場所も把握しているので、避難時には周りの人に伝達して役立てたい。

それ以前に大切なのは、日頃から近所の人とのコミュニケーションを図り、積極的に挨拶を交わし顔なじみになっておくことだ。避難の際には声をかけ合い、出遅れや置き去りをゼロにするためだ。

3つ目は、行政や公的機関による救助、援助、支援を提供する「公助」だ。私は、松山市の防災アプリをスマートフォンに入れ、最新情報を入手できるようにしている。そのため充電残量をこまめにチェックし備えている。

以上のことから、避難する際にはためらわず、即行動することが命を守る第一歩である。

やはり、大事なことは「自分の身は自分で守る」、「定期的な家族会議の開催」、「近所の人と顔を見える関係を築く」これらのことを常に念頭に置き、少しでも命が助かる可能性が高い行動に移せる糧としたい。

自分は大丈夫、という油断や思い込みを捨て、あの時こうしていればという後悔だけはしないよう、落ち着いた判断能力を培い、一番貴重な『命』を守りたい。

「ともにたすけ合う」

愛媛大学教育学部附属小学校 2年 ^{わかさ}若狭 ^{そう}早

長い間、土のにおいのきえない場所がありました。それは、松山じょうの東がわです。それだけ多くの土しやがながれてたことを、ぼくはにおいで知りました。

れいわ6年7月におきた、松山市緑町の土しやさいがい。ぼくは同じ町のダンス教室に通っているの、さいがいがおきるまで、

「山の緑がきれいな場しょだな。」

そんな風に思っていました。ですが、ぼくがダンス教室から帰って10時間後・・・あの土しやさいがいがおきました。

土しやさいがいがおきた一日で、うしなわれないのち、うしなわれた家。そこでくらしている人の生活は、大きくこわれてしまいました。またあんぜんにくらすためには、長い時間と多くの力がひつようになります。土しやがながれこんだ場しょは、工事の車でいっぱい。道にはまだ茶色い土がのこっていて、1週間後も1か月後も工事はつづきました。3か月がたち「おうきゅうふっきゅう工事」はおわりましたが、つぎは「本ふっきゅう工事」があります。ぼくは松山市のホームページで、工事がどれだけすすんだかをチェックするようになりました。月に1回ほど、工事げん場のしやしんがこう新され、少しずつ道がととのっていくのが分かります。早くあんぜんな場しょになってほしいと思います。

日本は今、きゆうな大雨による土しやさいがいがふえています。自分がひがいにあうかも知れない、という「もしも」をみんなで考えるひつようがあります。ぼくのお父さんは「ぼうさいし」のしかくを活かして、さいがいへのそなえ方を教えてください。どの道を通してひなんするか、もち出すものは何か。

「足にけがしないよう、ちゃんとくつをはいて外に出るようにね。」

お父さんのことばで、ぼくは「もしも」を考えられるようになりました。

そこで、ぼくがまず自分をまもるため「マイ・タイムライン」を作ることになりました。マイ・タイムラインとは、ぼうさい行動計画のことです。さいがいがおきた時、自分がいつ・何をするか考えていきます。ぼくとお父さんとの合いことばは、

「そなえあれば、うれしいなし。」

です。先にそなえておけば、いつもふあんにならずにすみます。また、心によゆうがあれば、まわりの人のサポートもできます。だからマイ・タイムラインがひつようなのだと思います。自分をまもり、ともにたすけ合うことをぼくも目指したいです。

緑町の本ふっきゅう工事は来年までかかります。土しやさいがいがおきないようにする、という大きなしごとです。おかげで道がきれいになり、土のにおいもなくなりました。ぼくは今日もダンス教室に通います。秋の緑町は、とてもさわやかな風がふいています。

「土砂災害は身近にある」

松山市立南中学校 3年 ^{あさの}朝野 ^{しの}詩埜

これまで土砂災害は、少し遠いニュースの中の出来事でした。それがここ数年の大雨などで私の身近でも土砂災害が起こったことにより、災害の前後のことにまで考えを巡らせるようになりました。

今回は私の身近で起こった2つの土砂災害についてと、土砂災害の防止対策について私が考えたこと、自然災害が起こる前に日頃から私たちにできることについて書きたいと思います。

令和6年7月、松山城の北東斜面で土砂災害が起こりました。この土砂災害では、3人の方が亡くなり、近くの飲食店やマンションに土砂が押し寄せると、大変大きな被害がありました。テレビで見る光景は、私が通っていた保育園のすぐ近くの風景で、胸が痛くなりました。

その翌年の今年6月には、母方の祖父母が住む目の前の川で土砂災害が起きました。大雨により川の片側の崖が崩れ落ちたことによって、土砂やがれきが川をふさぎ水があふれました。祖母は夜の真っ暗な中、川とご近所の様子を見に、ひざまで水に浸りながら歩いたそうです。この災害で、2棟が床下浸水するなどの被害がありました。

この2つの土砂災害はどちらも私にとってとても身近なもので、自然災害はいつ、どこで誰に起きても不思議ではないものだと改めて実感させられました。そして、自分にできる対策や備えは何があるんだろうと、何度も考えるようになりました。

こういった気持ちから、土砂災害への対策を知りたくなり、本で調べることにしました。防災には、斜面にコンクリートの壁を作るなど工事を行なって災害を防ぐハード対策と、災害時に備えて避難する方法などを考えるソフト対策があるということを知りました。今の私にもできるのは、ソフト対策です。その対策を私なりに2つ考えました。

1つ目は、近所の人たちで協力し合って日常的に周囲を観察しておくことです。理由は、その土地に住んでいる人たちが一番町並みを知っているからです。松山城も祖父母の崖崩れも、どちらも共通して、事前に近くで小規模な崖崩れがありました。そこにはブルーシートが掛けられ雨水対策がされていましたが、結果、周囲の地盤が耐えられなくなって大きな土砂災害に繋がったのではないかと意見があることを見聞きました。「山の木が少し傾いているかもしれない」など、いつもと違うほんの少しの変化が起きても、近所の景色なら誰かが変化に気が付きます。実際に、どちらの災害も近所の人たちは気づいていて、市役所に報告していたようです。それなのに、事前避難などの動きがなかったことがとても悔しいです。小さな声で動いてもらえることがもちろん一番ですが、私たち住民の小さな声を大きくする工夫ならできるかもしれないと思いました。日頃から近所の人たちと仲を深めたり、積極的に自分から地域のイベントや行事に参加すること。また、回覧板やSNSなどで情報を早く共有する工夫も大切だと思いました。

2つ目は、自然災害が起こる前に私たちにできることを考えました。それは、家族単位での備えです。家族で「自助」を万全にしておくことは、他の誰かへの「公助」へと繋がります。私の家では、隣に父方の祖父母が住んでいるため、食料や水を多めに置いておくなどの備蓄品の備えは父がしてくれていますが、家族の相談は不十分だなと今回感じました。そこで、防災マップを家族みんなで見て、避難場所の相談や連絡手段、防災バックなどの置き場を改めて話し合いました。他にも水害にあったらこうする、地震が起きたらこうするなど細かく決めて、家族みんなの命を守るために定期的に相談をすることにしました。

今回考えた、ソフト対策での小さな取り組みをするという日々の積み重ねが、命を守ることに繋がっていくのではないかと思います。自然災害は怖く、避けるのが困難ですが、日頃から気を付けることで生きられた命もあったのではないかと私は思います。一人でも多くの方が、大切な家で、大切な家族と安心して過ごせる町にするにはどうしていけばいいか、考えて、行動に移せる地域であって欲しいし、私もそうでありたいと思います。

最後に、一度起きてしまったことは二度と起きないようにしっかりと対策することが大切だと感じました。例えば、土砂崩れが起きてしまったら、その度しっかりと修復しておくことで、同じ場所やその付近で土砂災害が起こる確率を低くすることができると思ったからです。私はまだ中学生で、将来のことは分かりませんが、こういったハード対策で地域の人たちの役に立てる仕事が将来してみたいと思いました。

「土砂災害から身を守る」

松山市立三津浜中学校 2年 ^{たかた}高田 ^{れん}連

近年、線状降水帯や、集中豪雨など天気予報でよく聞く用語になりました。その用語を聞いたときに、気持ちが憂うつになります。

私は、硬式テニスをしているので、毎日、天気予報をチェックしています。大雨が降ると、芝のコートに水が溜まり、ボールが浮くので練習ができなくなるからです。

あと、昨年7月12日、午前4時前に、私の住む松山市も大雨によって松山城の東斜面で土砂崩れが起きました。そのときのことは今でも覚えています。テレビをつけると、ヘリコプターで中継していて、土砂崩れ現場上空からの映像でした。オレンジ色の隊服を着た消防隊員、水色の隊服を着た救急隊員の方々が、数えきれない程、集まっており、土砂で埋まった民家の周辺で撤去作業が進められているところでした。

土砂崩れ発生直後の映像は、何台もの消防車が連なっていて、白い隊服を着た警察官が大勢いました。パトカーも何台も見えました。

「下がれー、下がれー。」

と、大声で叫ぶ声の後に、突然、大量の土砂が何度も流れ込んでくる映像に言葉が出ませんでした。

マンションの中層階にまで、押し寄せた木々が刺さっている光景もあり、3人行方不明と、ニュースで伝えられていました。

その後、行方不明だった3人の方は、亡くなられていました。

松山城は、今まで何度も崩落していると聞いています。道の亀裂も激しかったこともあり、土中内部に雨水が浸透し崩落の原因になったそうです。もうこのような悲劇が起こってほしくないです。自分たちにできることは、家族の避難を促したり、早く異変に気付くことだと思います。

もう一つ、憂うつになる出来事がありました。私の祖父母は、宇和島市に住んでいます。宇和島市吉田町の山を所有していて、趣味でミカンを栽培しています。

平成30年7月、豪雨により、祖父母のみかん山も土砂崩れによって流されてしまいました。私にとって、これはただの自然災害ではなく、大事な人の財産が奪われた悲劇です。年末になると、私たちに、おいしく出来たみかんを食べてもらうのが楽しみで、段ボールに、大事に育ててきたみかんと、その思いを詰めて、県外にいる親戚、近所の人達、お世話になっている人達、そして私達に送ってきてくれたのが思い出されます。

私の祖父母は、みかん農家ではありませんが、同じ山には、みかん農家として、生計を立てていた方もいらっしまったそうです。その山や、みかんの木は戻ってきませんが、幸いにも、人命や家や車などの財産は、無事だったそうです。

土砂災害から身を守るためには、私達一人一人が土砂災害に対して日頃から備えておくことが重要だと思います。

まず1つ目、自分の住んでいる場所が、「土砂災害警戒区域」か確認しておくこと。また、避難の際にどこに、どのように逃げるのか知っておくことが大事なので、市町村が作成する土砂災害ハザードマップを利用して、避難場所や避難経路を確認するのが大事です。

そして2つ目、雨が降り始めたら、「土砂災害警戒情報」に注意すること。警戒レベル4相当情報であり、市町村が警戒レベル4避難指示を発令する目安となる情報で、災害のおそれが高まっていることを示しています。

そして3つ目、住んでいる地域に土砂災害警戒情報（警戒レベル4相当情報）が発表されたら、自治体からの警戒レベル4避難指示の発令に注意し、大雨警報、土砂災害の危険度分布などを参考にし、地域の方々に声をかけ合い近くの避難場所など、安全な場所に避難することが大事です。特に、お年寄りや、障害のある人は、避難に時間がかかるので、夜中に大雨が想定される時は、警戒レベル3が発令されたタイミングで早めに避難することが安全です。

土砂災害の前兆現象として、地面にひび割れができる、斜面から水が湧き出る、井戸や川の水が濁る、小石がバラバラと落ちてくる、地鳴、山鳴りがする、雨が続くのに川の水位が下がる、樹木が傾く、立木が裂ける音や石がぶつかり合う音が聞こえるそうです。

みなさんも、危険な場所に住んでいるかもしれません。日頃から身を守るために、最低限のことは知っておくべきだと思います。

「祖父母の体験を通して」

今治市立大三島中学校 2年 ^{おち}越智 ^{はるた}陽太

私は、土砂災害と言われると、西日本豪雨災害を思い出します。西日本豪雨災害とは、平成30年6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に北海道から中部地方を含む全国的に広い範囲で発生した土砂災害です。愛媛県では、この災害で33人の方が亡くなってしまいました。

そんな災害に、大三島も被害にあいました。私の中の雨の記憶は、雨がたくさん降った、くらいの記憶しか残っていませんが、私の記憶に西日本豪雨災害が残る理由は、その豪雨によって、父方の祖父母の家が地すべりの被害にあってしまい、家の中に土砂が流れ込んでしまったからです。幸い、祖父母は怪我もなく無事だったのですが、土砂災害にあった家をきれいに直すために、時々手伝ったりしていました。その時には、これまで遊びに来ていた家に土砂が流れ込み、とても臭く、そして土砂に浸かってものを大人の人が運んでいくのを見ていた記憶があります。これを見て、あの雨はとても危険なものだったのだと感じました。それから家の修理も無事に終わり今では普通の家に戻ったけど、修理が終わるまでは、キッチンもあまり使えず大変だったと思います。また、家の裏では野菜を育てていたのですが、その畑も土砂で完全になくなってしまいました。祖父母は被害が大きくなると怪我もなかったのが良かったのですが、この地すべりに巻き込まれてしまったら命があるか分かりません。なので、祖父母に話を聞いて災害の対策や、反省点、そして自分に何ができるのかを教えてくださいととも一緒に考えていきます。

祖父母の話を聞くと、その日の朝に市役所の方が家に来て、

「近くで土砂災害が起きたので、早く逃げてください。」

と言われたそうですが、1回、土砂災害の現場に行ってしまいました。すると、第一波は70メートルぐらい先で止まっていたそうです。それを見て、まだ大丈夫、うちには来ない、と思って家でゆっくりしていました。そんなときにドーンと大きい地ひびきがして家に土砂が入ってきました。窓ガラスも壁も大きいピアノもなぎ倒してきました。このときには土砂が入道雲のように大きくなってきてこのまま自分のところに来るのではないかと、という恐怖まで覚えてしまったと言っていました。そして何も持たずに避難所に避難したそうです。

この体験談を通して、反省する出来事を聞くと、災害が起きたところには絶対に行かないということです。祖父が見に行ったときにはたまたま止まっていたけど、これが流れていたら、命はなかった、というふうに語ってくれました。また、避難するときには何も持っていけなかったのが、防災グッズを準備しておいて、すぐ物資を持って避難することも大切だということも教えてくれました。私も缶詰や水だけでも準備をしておきたいです。

土砂災害が起こった後には、土砂をどかすのにも、家を直すのにもご近所さんや親戚の人など、大勢の人に助けられた、だからご近所の人と仲よくすることも減災につながる、というふうに自助だけではなく、共助の大切さも教えてくれました。祖父母の経験を生かして、災害が起きる前からしっかり準備をしてみんなと協力して、どんな災害にもしっかり対応できるようにしていきたいです。そして、災害で亡くなる人がゼロになるように自分にできることを考えて行動していきたいです。

「あたりまえが怖くなった日」

愛南町立城辺中学校 3年 ^{すなだ}砂田 ^{りゅうせい}琉成

去年の冬、テレビで何度も何度も流れていた能登半島地震のニュース。その映像を見ていると、愛南町の山奥にある山出の祖父母の家を思い出した。

細くてくねくね曲がった山道。古くて立派な木造の家屋。その後ろには棚田と急な斜面が続く。雨が多い日などは棚田の後ろにある山が崩れるのではないかって怖くなったこともある。でもそれ以上に優しい祖父母と美しい自然に囲まれてたその家には、安心やぬくもりを感じていた。

だけど能登半島の町並みが一瞬で崩れ落ちていく様子を見た時、何かが変わった。

「おじいちゃんやおばあちゃんが住んでいる場所がもし、あんなふうになったら」そう思うと怖くなった。

私は能登半島地震をきっかけに、地震や土砂災害について調べるようになった。日本は、世界有数の地震大国である。ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、そして、フィリピン海プレート。複雑に入り組んだ4つのプレートの上に、日本列島は存在している。これらのプレートが動くことで地震が発生し、津波やがけ崩れ、土石流などの土砂災害といった二次災害も引き起こされる。

特に最近では、SNSを通じて「日本が終わる」とまで言われるような巨大地震が起こる噂が立ち、7月にフィリピン海プレートが原因ではないかと予測される地震の可能性がまことしやかに語られ、騒がれた。

9月時点では大震災は起こってないけれど、僕の不安は完全には消えていない。その不安には理由がある。

それは、先日、「えひめ土砂災害情報マップ」の愛南町版を見ていたら、祖父母の住む地域は土砂災害警戒区域に入っていて、土石流、急傾斜地崩壊、地すべり、全ての特別警戒区域に入っていたからだ。それに反して、比較的安全だと言われる場所に、僕の住む家はある。でも、「それって安心できることなのだろうか。」南海トラフ巨大地震は、近い将来やって来る。南海トラフ地震がいつきてもおかしくない現実を考えると、山奥にある祖父母宅にも私の住む家にも心配はあるのだ。

能登の方も、まさか元日にあんな大震災が来るなど思ってもみなかったはずだ。「災害は忘れたころにやってくる」とよく言われる。よく聞く言葉だけど、実感がなかった。

しかし、能登半島地震で、日常が一瞬で壊れていく様子を見て、私は初めてその言葉の意味が分かった気がした。

学校の防災訓練でも、「自分の命は自分で守る」と教えられてきた。その重要性は感じる。だが、私自身は非常食の場所も避難経路を歩いたこともない。頭では想像できても、本当に来るか分からない地震のために動くことは、面倒でつい後回しになっていた。しかし、それは危険なことだと気付いた。

そこで防災予防について調べてみた。防災予防とは、自分の命を自分で守る行動と同時に、大切な人や地域の人の命と大好きなふるさと「愛南町」を守る行動でもある。

そして、それは今日から始められる。

さらに、土砂災害は、突然人々の暮らしを奪う恐ろしい自然災害だ。近年、大雨による土砂災害は増えている。日常の中で、「備え」を積み重ねていけば、被害を小さくすることは必ずできると思う。まず大切なことは、一人一人が住んでいる地域について知ること、避難場所や避難経路を家族と話し合い、決め、避難場所までの避難経路で危険箇所をハザードマップで確認し、安全なルートを選ぶこと、防災グッズを準備すること、この3つは最も基本で確実に私たちが実践できる防災だ。

さらに雨どいや側溝を掃除して水の流れをよくしておくこと、庭に木や草を植えて土を固めるなど身近な工夫も役に立つ。

また、新技術としてセンサー、ドローンの導入をすることで、小さな亀裂を一早く見つけることができ、水のしみ込み具合も確認できる。センサーやドローンを役場が管理することで何かあった時に早く放送でき、二次災害に備えて早めに準備できる。小さな一歩かもしれないけれど、その一歩がいざというときに大きな差を生むと考える。

「備えあれば憂いなし」この言葉を味方に付けて、離れて住む祖父母の、私の住む家族の、かけがえのない命、かけがえのない日常を守りたい。